

海と山と森を繋ぐ清流の魚たち*

Fish of Noble-lineage to Connect the Sea

And Mountain, Forest

岩崎行伸**

世界の四大文明地は河川の畔で生まれたが、ヒトと河川の付き合いは更に古いものである。ヒトは河川の水を飲み、河川に棲む生きものや河川にくる生き物を食料として生活し、河川の位置を行動範囲の目途にもしていた。河川の氾濫した後の栄養が豊かになった土地に稲等の作物を作った。人々の河川の恩恵に感謝する気持ちが、豊かな精神を育み、身心の現景観の一つとなっていた。このような河川とヒトの長期的付き合いの歴史があるためだろう、大自然の中の河川のみではなく都会を流れる河川を観察しても、身心が和む人が多くいる。

河川の水は、各地の山々に降雨した水や雪解け水が、やがて湧水となって地表に出て集まったもの。雨や雪の多くは、海の水が太陽の熱で蒸発して雲をつくって降雨したもの。それが、山々の土や石や岩を通して栄養豊かな清澄となって湧出し、河川となって海に戻ってゆく。このような水が繰り返し巡る循環の流れは、自然界が酸素を造り出すことと同等に重要なサイクルである（図1、2）。



図1. 海(駿河湾口)の日の出/望星丸Ⅱ世)

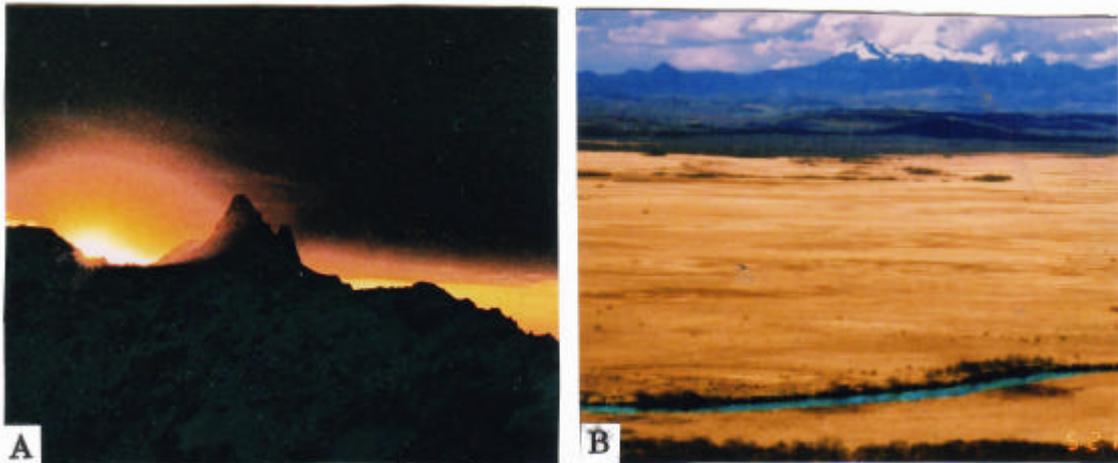


図2. 海と山と森林を繋ぐ川 (A:北アルプス槍ヶ岳,1985、B:北海道/釧路湿原/釧路川,2003)

森で栄養豊かになった淡水は河川の生きものたちを育むだけでなく、海に運ばれて海の生きものたちをも育む。この河川を遡上し産卵し(シロザケ・サツキマス・サクラマス)海で3,4年成育し、再び母川の匂いを忘れずに産卵帰する海系の魚もいる(図3.)。

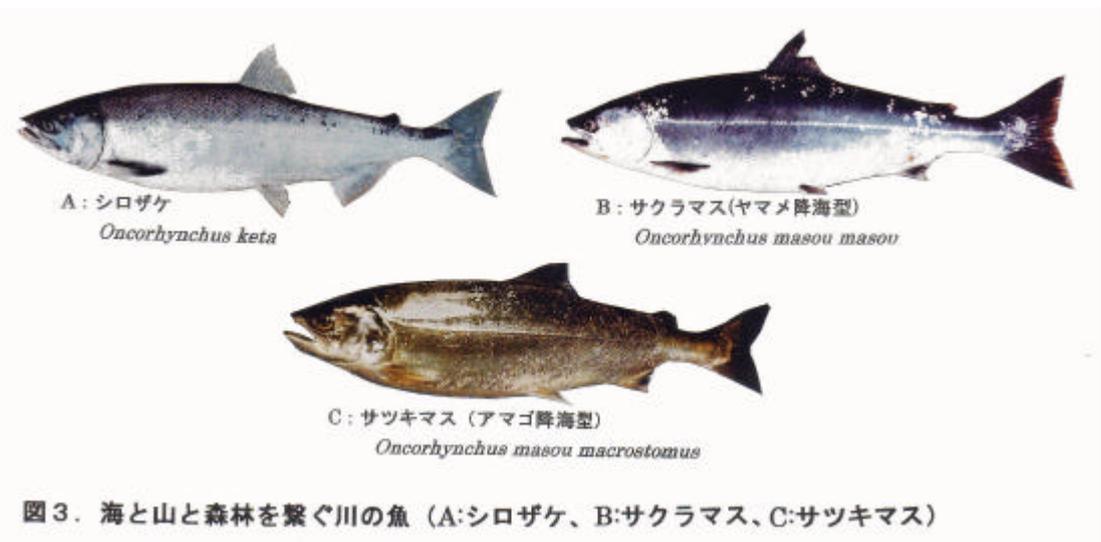


図3. 海と山と森林を繋ぐ川の魚 (A:シロザケ、B:サクラマス、C:サツキマス)

清流を観察して、太陽と海が雲を作るところや、長時間をかけて湧く山奥の小さな川、多くの生きものや人々の生活の中を流れる小川の姿、河川が海と出会うところを想像するのは楽しいことである。河川のせせらぎの流れから、海と森と、そこに生きる生物や生活する人々との繋がりが想像できる。すると、身心に一本の河川を持つたような、緩やかな癒やしの気持ちになる。

河川の仕組みや動きは、言葉として想像することができる。残念ながら、現在の、本来の美的な河川を想像することは困難となっている。河川は兩岸をコンクリートで固めた川。このことも、美しい気がするが、嘗ての美しい河川の景観とはどのようなものであった? 兩岸にアシ等の植物の生きた河川は、大小

の曲線を描きながら、緩やかと流れ、飛び石になるような岩が頭を出し、川底には、貝や藻が生きた岩のある変化に富む景観だっただろうし、そこに多種多様な野生の生きものたちが郷で生活していた。兩岸や川底をコンクリート固めた、ヒトの「命」だけを考えた河川は、かつての「命」に溢れた豊かで優しい河川ではない。河川の現景観を忘れた人の心の川が流れる行方は、果たして何処へ向うのであろう。

参考図書

- 1) 森が消えれば海も死ぬ(1993): 陸と海を結ぶ生態学、(株)講談社、松永勝彦著
- 2) 日本の淡水魚(2000): フォーカス図鑑、(株)学研、木村義志監修

添付資料

- 1) 海(駿河湾口の日之出)
- 2) 海と山と森林を繋ぐ清流(A:北アルプス槍ヶ岳、B:釧路湿原・釧路川)
- 3) 海と山と森林を繋ぐ清流の魚(A:シロザケ、B:サクラマス、C:サツキマス)

*水棲&環境研究、会員:日本野鳥の会・自然観察研究会・昆虫写真研究会